

氏名	榎本知郎 えのもとともお
学位の種類	理学博士
学位記番号	論理博第656号
学位授与の日付	昭和54年7月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	The sexual behavior of Japanese monkeys (ニホンザルの性行動)

(主査)
論文調査委員 教授 日高敏隆 教授 池田次郎 教授 河合雅雄

論文内容の要旨

申請論文は、ニホンザルの性行動について行動学的な分析を加えたものであり、血縁関係の明らかな志賀A群が研究の主対象となっている。主論文 Part I では、交尾期に特徴的に見られる行動のすべてと、交尾期に出現頻度が高くなる行動のすべてを性行動として扱い、46の行動パターンについての精密な記載を行った。申請者は、これらの諸行動の記号性を検討しているが、hindquarters-display (HQD) という6つの要素的行動の連鎖からなる行動は、そのあとに交尾の見られた率が74.1%、交尾の前にこの行動が見られた率は76.9%という値によっても明らかなように、それが交尾と強く結びついた記号的行動であり、メスの恐怖を減殺するために発達した儀式的行動であるとしている。これと類似の記号性をもつものに、hand-on-back という行動がある。各性行動の記載と分析について、性行動の各パターンの時間的な継起をその出現頻度によって表わしながら、ニホンザルのもっとも一般的な性行動のあり方とそのヴァリエーションが図示されている。交尾の頻度についても検討が加えられ、従来の研究結果とは異なり、オスの順位と交尾回数との間には相関を認めないことが示されている。メスの側からのオスの選択をとっていても、メスは必ずしも高順位のアスを交尾の対象として選択していない。同じ血縁集団に属する両性の間では、オスは積極的な行動を示すが、メスは消極的で、このメスの拒否的な態度によって同じ血縁内での交尾は低い値にとどまっており、ニホンザル社会におけるインセスト回避は、オスの出自群からの離脱だけでなく、メスの心理的な回避機構にもよっていることが明らかにされた。

主論文 Part II は、性的対象の選択をさらに掘り下げようとしたもので、性的交渉の過程を8種類に分け、これを指標として分析をおこなった。血縁関係にある両性の間では、37.5%がともに消極的で射精を伴わず、伯父一姪、従兄妹間に正常な交尾が見られたにすぎない。非交尾期に諸種の親密な関係にあるペアも射精を伴わず交尾に終ることが多いのに対して、交尾期にオスがメスを攻撃する関係では、一般に正常な交尾が見られた。申請者は、以上の分析に基づいて、インセスト回避機構はこれらの社会関係と密接な関係にあり、これまで問題にされてきた母-息子間の関係にとどまらず、より広い血縁的、親和的關係にも同様の回避の傾向が見られること、メスの側の強い拒否による選択性が認められ、これがオスの群れ

からの離脱にも関係しているにちがいないことを指摘した。

論文審査の結果の要旨

霊長類の性行動に関する分類は、C. R. Carpenter (1942) その他があるが、本申請論文において提出された類別と記載ほど詳細をきわめたものはかつてない。しかもその記述は的確ですぐれたものであり、後進の研究者の利用に耐えるものを残したという点からしても得難い労作であると言ってよい。申請者は、これらの諸行動の記号性について検討を加えているが、とくに、hindquarters-display という行動に着目して、その発見とそれに伴って継起する交尾との関係について量的な分析をおこなっている。これは、ニホンザルの儀式的行動の一つに加えられた、見事な行動学的分析の一例であると言ってよいであろう。このようにして分類され、それぞれに機能的な分類を行った46の性行動パターンに基づいて、性関係および性的交渉の対象選択についての分析が試みられている。その結果、以下の二つの注目すべき結論が得られている。その一つは、優位なオスほどより多くの交尾を行い、自らの遺伝子をその群れに残す機会をより多くもつという、従来支配的であった諸説に対する反論である。もう一つは、社会構造との関連で、長く議論の焦点となっていたインセスト回避機構について、現象的な解を見いだした点である。前者は、社会現象についての安易な機械論に対する批判を含んでおり、後者は、人間においてユニヴァーサル・カルチュアと呼ばれてきたインセスト・タブーの解明に一步近づきえた業績として高く評価することができる。

以上の新知見のほか、全体として、きわめて複雑な現象を堅実な方法で量的に解析していった研究態度は見事であり、また、従来の行動類型にとらわれず、自らの正確な観察にもとづいて、行動パターンの類別のメッシュをさらに微細にしてゆくことによって自らの研究を成功に導いているが、この点もとくに評価してよい。

よって本論文は、理学博士の学位論文として価値あるものと認める。